

学力向上のためのことば教育の評価と実践

研究代表者：安藤 理

(東京大学社会科学研究所助教)

共同研究者：三浦 隆志

(岡山県立岡山操山高等学校主幹教諭)

金山 満彦

(岡山県立岡山操山高等学校教諭)

香山 真一

(岡山県立林野高等学校教頭)

浅沼 淳

(岡山県立倉敷天城高等学校教諭)

研究成果要約

研究活動概要

本研究では、アンケート調査、文献研究、インタビュー調査といった総合的な手法を用いることにより、中学生・高校生・大学生の学力がどのように形成され、どのように活かされているかを把握し、それをふまえたうえで新学力と旧学力を結びつけるための文章のフォーマットを教えるテキストを作成した。

成果概要

前半の統計分析においては、中学1年～3年、高校1年～3年、高校3年～大学2年の3つのパネルデータの分析により、新学力と旧学力の形成メカニズムを解明した。主要な知見は、以下の4つである。①模試偏差値が高い生徒ほど、よいレポートを書ける。②もともと新学力の高い生徒ほど、岡山操山中学・高校が特色としている調べ学習、発表・議論型授業に積極的に参加している。③岡山操山中学・高校が特色としている調べ学習、発表・議論型授業に参加することによって、自ら学ぶ力や社会力が伸びている。④ただし、岡山操山中学・高校が特色としている調べ学習、発表・議論型授業に参加することによって、模試偏差値が伸びたとは言えない。分析結果から新・旧学力の形成メカニズムをまとめると、旧学力は新学力の形成に役立つが、新学力は旧学力の形成に結びつかないということである。

成果活用について

ここから導かれる実践的課題は、新学力から旧学力へ戻る回路を形成する必要があるということである。そこで、後半においては、文献研究とインタビュー調査を通して、新学力から旧学力へ戻るための「あんどうメモ」という文章執筆術のテキストを作成した。そのエッセンスが図である。これにより、主張（＝新学力）をするためには知識（＝旧学力）が必要というかたちで、新学力から旧学力への回路が見出されることになった。

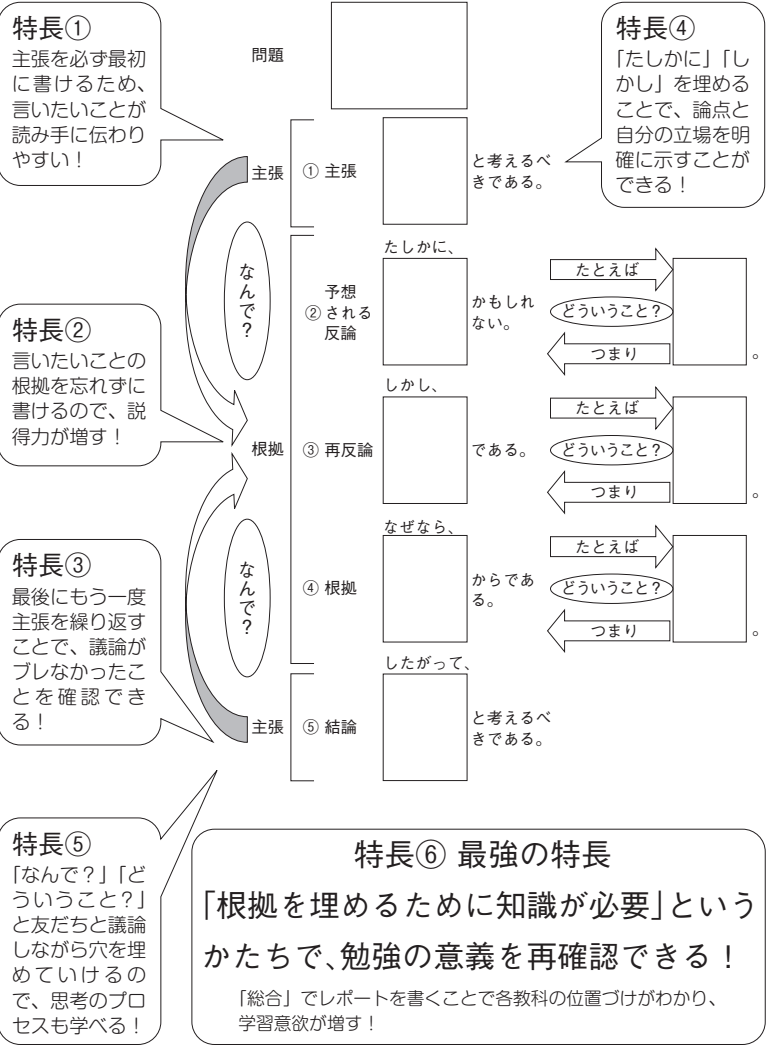


図 「あんどうメモ」の概要

今後の研究課題

今後は、完成したテキストを実際に2010年度の総合の時間の授業で用い、フィードバックを行うとともに、パネル調査を継続していくことにより、その効果を大学の学習という観点からとらえなおしていきたい。

研究成果論文

1. 問題設定

本研究の目的は、アンケート調査、文献研究、インタビュー調査といった総合的な手法を用いることにより、中学生・高校生・大学生の学力がどのように形成され、どのように活かされているかを把握し、それをふまえたうえで新学力と旧学力を結びつけるための文章のフォーマットを教えるテキストを作成することである。

本研究が必要とされる問題背景は以下の2点である。

問題の第一は、「ことばと教育」の現場に深刻な混乱状況があるということである。中学・高校、大学の2段階に分けて考えよう。

まず、中学・高校である。中高生が感じる問題は、作文・小論文・レポートの書き方がわからないというものである。「画一的」な教育を打破するために導入された「総合の時間」においては、「画一的」の裏返しとして「自由に」書くことが推奨された。しかし、「自由に書け」と言われても何をどう書いていいかわかるはずはない。一方で、中学・高校教員が抱える問題は、総合の時間における小論文・レポートの指導の仕方がわからないというものである。教科指導の専門家である先生方に教科の枠を超えた内容の指導を要求しても、多忙化してしまうだけだというのが実情である。

次に、大学である。大学生が抱える問題は、論述式テスト・レポート・卒論の書き方がわからないというものである。そういう場合、「とりあえず字数を埋める」というかたちで作成されるのが通常である。このような戦略をとられると大学教員としてはたまったものではない。「主張」もない、ただ長い答案・レポートを読まされるはめになるからである。

以上から、各段階で文章の書き方が問題となっていることが確認できる。

問題の第二には、第一のような問題が起こる背景として、旧学力（＝知識の注入）か新学力（＝知識の活用）かというかたちで、学力をめぐる議論が迷走してきたことが挙げられる。一連の「学力低下論争」に教育学においても統一した見解は見られなかったし、教育政策としても大正期以来、知識の系統的伝達か経験による知識の活用かで振り子のように行ったり来たりの状況が見られたのである。こうした問題が解決されないまま残るのは、実証的データに基づく議論がなされてこなかったからである。知識を注入すると主体的に活用できるようになるのか、活用する機会を与えるから知識を身につける意欲がわくのか、あるいは、それらが双方向で影響しあっているのか。そうしたメカニズムに関するデータ自体の蓄積が乏しかったのである。

以上のような問題から導かれる課題は、実証データにもとづいて学力形成のメカニズムを検証したうえで、知識の注入と活用が相乗効果をもたらすような文章の書き方に関するテキストを作成することである。ただし、テキスト自体を本報告書に載せると紙幅を大幅に超えるため、本報告書では質問紙調査にもとづく学力形成メカニズムに重きを置き、文献研究とインタビューをもとにして書かれたテキストについては、一部を最後の政策提言で紹介し、詳細は別原稿として添付する。

2. 先行研究

教育実践の効果をその後の成長から評価するという試みは教育社会学の観点からはなされてこなかった。教育実践の効果は長い視点でとらえなければならないはずであるにもかかわらず、ほぼなされてこなかったのである。

ただし、稀少な例外として、日本のデータを用いて検証したのが見られる。授業実践と授業理解度との関係について検証したものとして安藤（2006）、その枠組みをTIMSSにあてはめたものとして須藤（2007）がある。しかし、一時点の調査であるため逆の因果の可能性を否定できない。また、二時点のデータを用いて「効果のある学校」という視点から分析したものとして川口（2009）があるが、なぜ効果があるのかについての考察が見られない。

そこで、同一個人を追跡するパネルデータを用いて、学力の形成メカニズムを検証する必要があるのである。

3. 分析枠組みとデータの概要

3.1 分析枠組み

分析枠組みは図1である。分析の目的は、2008年度（wave 2）における新学力観型授業が2009年度（wave 3）における学力にどのような影響を与えたかを検証することである。新学力観型授業を処置変数、身につけた力を結果変数として分析する。

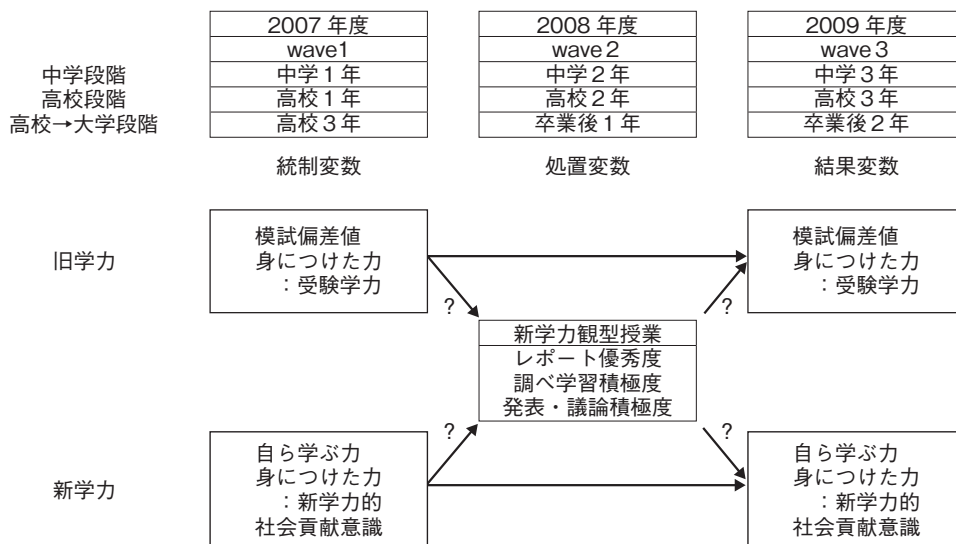


図1 分析枠組み

ただし、その際に、「逆の因果」と「疑似相関」の問題に対処しなければならない。これは、通常の一時点のアンケートでは、「調べ学習に積極的な生徒ほど自ら学ぶ力が高い」という分析結果が出ても、それを因果関係としてとらえることはできないという問題である。その問題の第一は「逆の因果」である。具体的に言うと、仮に「調べ学習に積極的に参加した生徒ほど自ら学ぶ力が高い」という分析結果が得られたとしても、もともと自ら学ぶ力が高い生徒が調べ学習の授業に積極的に参加したのではないかという逆の因果の可能性を排除できないということである。問題の第二は「疑似相関」である。具体的に言うと、仮に「調べ学習に積極的に参加した生徒ほど自ら学ぶ力が高い」という分析結果が得られたとしても、もともと成績の高い生徒が調べ学習に積極的に参加し、同時に、自ら学ぶ力が高くなっていったため、調べ学習と自ら学ぶ力が関連しているように見えたという疑似相関の可能性を排除できないということである。

その点、パネルデータでは同一個人を追跡しているため、その生徒個人のなかで調べ学習によって自ら学ぶ力が高まったかどうかを確認することができる。

具体的には、2007年度（wave1）の時点での学力を統制変数として投入することで逆の因果と疑似相関の問題に対処する。これによって、もともと同じような学力を持っている生徒同士で比べて、新学力観型授業に積極的に参加したことがその後の学力に影響を与えているかどうかを検証することができる。

3.2 岡山操山中学・高校の位置づけとデータの概要

岡山操山中学・高校の教育に着目する意義は、受験学力だけではなく、知識の活用力を育成するためにさまざまな先進的取り組みを行ってきたことである。ディベート、弁論大

会に力を入れ、集大成である「学問研究」においては、A4で5枚程度のレポートを提出させる。こうした取り組みによってどのような力が形成され、それはどのようなかたちで活かされるのか。また、それは従来型の知識（＝旧学力）とどのように関連しているのだろうか。

もちろん、岡山操山中学・高校はもともと進学率が100%に近い進学校であり、さらに中学の時点で選抜を行っていることによって、もともと学力の高い生徒を集めてきた中での実践の効果を測定しているだけではないかという意見もあるかもしれない。しかし、今回の研究の目的は学校横断的に各学校の教育効果を測定するのではなく、生徒個人のなかでの成長を時系列的に追っていくことである。そのためのデータとしてパネルデータを蓄積できているため、もともと学力の高い生徒が集まっていること自体は問題とならない。

また、先進的な取り組みに着目したのは、課題を先取りできるからである。つまり、先進的な取り組みだからこそ直面する課題というものが存在し、その課題を浮き彫りにすることで、今後他の学校が直面するであろう課題を前もって把握できるということである。

2007～2009年度にわたるデータの概要は表1である。中学1年～高校3年までの在校生調査は、ホームルームの時間を利用した集団自記式である。回収率はいずれも95%前後である。卒業生調査は、2008年度が32.5%、2009年度が29.5%である。

今回の報告書では、高校、大学での能力の形成メカニズムを検証するため、①中学段階、②高校段階、③高校から大学段階の3段階に分けて分析を進める⁽¹⁾。

具体的に①については、2007年度（wave 1）に中学1年生だった生徒が中学2年のときの新学力観型授業によって、中学3年時にどのような能力を身につけたかを検討する。②については、2007年度（wave 1）に高校1年生だった生徒が高校2年の時の新学力観型授業によって、高校3年時にどのような能力を身につけたかを検討する。③については、2007年度（wave 1）に高校3年生だった生徒が、高校卒業後2年して、大学においてどのような力を発揮できているかを検証する。

(1) ただし、中学段階の分析結果は、おおむね高校段階と同様の結果が得られたため、本報告書では紙幅の関係により、高校段階の分析結果のみを検討していくことにする。

表1 データの概要

	wave 1		wave 2		wave 3	
	2007年度		2008年度		2009年度	
	アンケート	模試偏差値	アンケート	模試偏差値	アンケート	模試偏差値
中学1年	2008年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式	10月の学力推 移テスト	2008年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式	10月の学力推 移テスト	2009年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式	10月の学力推 移テスト
中学2年	2008年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式	10月の学力推 移テスト	2008年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式	10月の学力推 移テスト	2009年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式	10月の学力推 移テスト
中学3年	2008年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式	10月の学力推 移テスト	2008年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式	10月の学力推 移テスト	2009年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式	10月の学力推 移テスト
高校1年	2008年2月	10月の実力テ スト	2008年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式		2009年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式	2009年7月の 進研記述模試
高校2年	2008年2月	10月の実力テ スト	2008年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式		2009年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式	2009年7月の 進研記述模試
高校3年	2008年2月	8月の実力テ スト	2008年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式		2009年7月 HRの時間を 利用した集団 自記式	2009年7月の 進研記述模試
卒業後1年			2008年7月～ 8月 郵送法		2008年7月～ 9月 郵送法	
卒業後2年					2008年7月～ 9月 郵送法	

3.3 変数の説明

①結果変数

結果変数はすべて2009年度（wave 3）における変数を投入した。

旧学力

模試偏差値 2009年度の模試の偏差値を投入した。中学3年は、2009年10月に行われた学力推移テスト、高校3年は、2009年7月の進研記述模試である。

身につけた力：受験学力 質問文は、「これまでの学校生活のなかで、あなたは以下のものを身につけたと思いますか」である。選択肢のうち、「受験に役立つ知識」について「かなり身についた」を「4」、「まったく身につかなかった」を「1」とする4点尺度として投入した。

新学力

自ら学ぶ力 「授業でわからなかったことはそのまましておかない」「授業がきっかけとなって、さらに詳しいことを知りたくなる」「高校や大学で勉強するうえで、勉強をとおして得た知識は役に立つと思う」について、「とてもあてはまる」を「4」、「まったくあてはまらない」を「1」とする4点尺度とした。逆に、「卒業できる程度の成績をとっていけばいいと思う」「何をどのようにして勉強すればいいのかわからない」については、「まったくあてはまらない」を「4」、「とてもあてはまる」を「1」とする4点尺度とした。

身につけた力：新学力 質問文は、「これまでの学校生活のなかで、あなたは以下のものを身につけたと思いますか」である。選択肢のうち、「自分で計画を立てて学習する姿勢」「本やインターネットをもとに必要な情報をまとめる力」「大勢の前で自分なりの考えや意見を表現する力」「他人と共同作業する力」「イベントを企画したり実行したりする力」「他人の考えや意見をまとめる力」「ひとつのことにじっくり取り組む姿勢」「パソコン・視聴覚機器などを使う力」「社会の役に立とうとする姿勢」「現代社会の諸問題を解決していこうとする姿勢」「心と身体の健康を管理する力」について「かなり身についた」を「4」、「まったく身につかなかった」を「1」とする4点尺度として投入した。

社会力 岡山操山中学・高校では、「いまある社会に適応している状態を意味する用語」としての「社会性」と区別し、「いまある社会の運営に積極的にかかわるだけでなく、さらに進んで社会の現状をもっとよくしていこうとする意欲」を「社会力」として定義して教育方針としてきた。そこで、ここでは、この社会力を新学力観型授業で育成したい目標として評価することを試みる。具体的な変数としては、「国や社会のリーダーになりたい」「社会の一員として、日本をもっと暮らしやすくしたい」「将来は地元のために貢献したい」「日本よりも海外で活躍したい」「将来社会の役に立つために、自分の能力を高めていきたい」「困っている人が少なくなるように社会を変えていきたい」「社会に出ても学び続けたい」という選択肢について、「とてもそう思う」を「4」、「まったくそう思わない」を「1」とする4点尺度として投入した。

大学生生活 大学生生活について、「自分の専門科目」「専門以外の教養科目」「資格取得のための勉強」「サークル活動・部活動」「アルバイト」「友だちづきあい」「講義出席率」の7つの項目について熱心に取り組んでいるかを4点尺度で質問した。

大学における学習 大学における学習について、「計画通りに学習をすすめること」「必要な情報（資料、文献など）を要領よく集めること」「調べたことや自分の考察をうまく文章にすること」「共同作業の場面で、リーダーシップを発揮すること」「議論する場面で、他人の意見を踏まえて発言すること」の5つの項目について「よくできた」から「まったくできなかった」までの4点尺度で質問した。

②処置変数

新学力観型授業の指標として、3つの変数を用意した。

レポート優秀度 岡山操山中学・高校では、系統別課題研究という総合の時間でレポートを提出させており、優秀なレポートを報告書としてまとめている。ここでは、そこに選ばれた生徒を「1」とするダミー変数を作成した。

調べ学習積極度、発表・議論積極度 質問文は、「あなたは以下のような授業にどれくらい積極的に参加しましたか」である。それに対する選択肢として、「自分たちで調べる授業」「自分たちの考えを発表したり、意見を言い合う授業」を載せ、その回答を「積極的に参加した」を「4」、「積極的には参加しなかった」を「1」とする4点尺度として投入した。

③統制変数

中学・高校分析の統制変数は、結果変数と同じ項目を2007年度（wave 1）の項目から投入した。質問文などは完全に対応している。卒業生については、wave 1における模試偏差値を統制変数とした。

4. 分析

4.1 高校段階における学力形成

新学力観型授業が学力に与える影響を検討する前に、そもそもどのような生徒が新学力観型授業に積極的に参加しているかを検証しておく。

表2 レポート優秀度の規定要因に関するロジスティック回帰分析

	B	Exp (β)	
女子ダミー	-0.15	0.86	
模試偏差値	0.09	1.09	**
将来職未定ダミー	-1.91	0.15	†
定数	-7.11	0.00	**
N	226		

** >0.01、* >0.05、† >0.10

表2は、レポート優秀度の規定要因に関するロジスティック回帰分析の結果である。これを見ると、模試偏差値が高いほど、レポート優秀賞をとりやすい傾向にあるようである。ただし、調べ学習や発表・議論への積極度については、模試偏差値の影響が見られなかった（表は省略）。旧学力は、新学力型授業へ積極的に参加できるかではなく、実際によりレポートを書けるかどうかに影響を与えていると考えることができる。

表3 wave 3 変数を従属変数とする回帰係数の例

	B	標準 誤差	β	
wave 1 模試偏差値	0.018	0.005	0.242	**
wave 2 自分たちで調べる授業	0.261	0.066	0.276	**
wave 1 授業でわからなかったことはそのままにしておかない	0.200	0.075	0.209	**
N	175			
F 値	14.804	**		
調整済み R2 乗値	0.206			

** >0.01、* >0.05

以上をふまえたうえで、新学力観型授業が旧学力、新学力に与える影響について検討していく。表3は、wave 3 変数を従属変数とする回帰係数の例である。従属変数の例は、wave 3 における「授業でわからなかったことはそのままにしておかない」の4点尺度、独立変数はレポート優秀者ダミー、統制変数として wave 1 における模試偏差値と「授業でわからなかったことはそのままにしておかない」の4点尺度を投入している。ここからわかるのは、wave 1 における自ら学ぶ力を統制したとしても、レポートで優秀賞を得たことによって生徒は「授業でわからなかったことはそのままにしておかない」と強く考えるようになっていくということである。したがって、レポートをうまく書けたことが自ら学ぶ力に結びついていると考えることができる。

それでは、他の学力についてはどうだろうか。表4は、表3と同様なかたちで wave 1 の状況を統制しながら、wave 3 の新学力・旧学力に対する、wave 2 の新学力観型授業の効果をまとめたものである。

「自ら学ぶ力」について、調べ学習や発表・議論がよい影響を与えていることがわかる。具体的に言うと、レポートで優秀賞を取った人ほど、「授業でわからなかったことはそのままにしておかない」「授業がきっかけとなって、さらに詳しいことを知りたくなる」という意識が高まり、逆に、「何をどのように勉強すればいいのかわからない」という意識が弱まる。調べ学習や発表・議論といった授業に積極的に参加した生徒にも同様の傾向がみられる。

表4 wave 3の新学力・旧学力に対して wave 2の処置が与えた影響

		wave 2 処置変数				
wave 3 従属変数		レポート優 秀者ダミー	調べ学習 積極度	発表・議論		
新学力観	自ら 学ぶ力	授業でわからなかったことはそのままにして おかない	*	**	**	
		授業がきっかけとなって、さらに詳しいこと を知りたくなる		**	**	
		卒業できる程度の成績をとっていればいいと 思う		*	*	
		高校や大学で勉強するうえで、勉強をとおし て得た知識は役に立つと思う				
		何をどのようにして勉強すればいいのかわか らない	**	**	**	
	身に つけた力	自分で計画を立てて学習する姿勢				
		本やインターネットをもとに必要な情報をまと める力			*	
		大勢の前で自分なりの考えや意見を表現する 力		**	*	
		他人と共同作業する力		*	*	
		イベントを企画したり実行したりする力		**	**	
		他人の考えや意見をまとめる力		**	**	
		ひとつのことにじっくり取り組む姿勢		*	**	
		パソコン・視聴覚機器などを使う力	**	**	**	
		社会の役に立とうとする姿勢	**	**		
		現代社会の諸問題を解決していこうとする姿 勢		*		
	心と身体を健康を管理する力		**	**		
	社会貢献 意識	国や社会のリーダーになりたい				
		社会の一員として、日本をもっと暮らしやす くしたい	**	*		
		将来は地元のために貢献したい	**	**		
		日本よりも海外で活躍したい	**			
		将来社会の役に立つために、自分の能力を高 めていきたい				
		困っている人が少なくなるように社会を変え ていきたい				
	社会に出ても学び続けたい			*		
	旧学力観	身に つけた力	受験に役立つ知識			
		偏差値	模試偏差値			

** >0.01、* >0.05

身につけた力についても、調べ学習や発表・議論がよい影響を与えていることがわかる。レポートで優秀賞をとった生徒ほど、これまでの高校生活の中で「パソコン・視聴覚機器などを使う力」「社会の役に立とうとする姿勢」を身につけたと考えるようになっていく。調べ学習や発表・議論といった授業に積極的に参加した生徒は、「大勢の前で自分なりの考えや意見を表現する力」「他人と共同作業する力」「イベントを企画したり実行したりする力」「ひとつのことにじっくり取り組む姿勢」「パソコン・視聴覚機器などを使う力」「社会の役に立とうとする姿勢」「現代社会の諸問題を解決していこうとする姿勢」をよく身につけたと考えるようになっていく。

社会貢献意識についても、調べ学習や発表・議論がよい影響を与えていることがわかる。レポートで優秀賞を取った生徒ほど「社会の一員として、日本をもっと暮らしやすくしたい」「将来は地元のために貢献したい」「日本よりも海外で活躍したい」「将来社会の役に立つために、自分の能力を高めていきたい」という意識が高まっている。

それに対し、総合の時間で調べ学習をしたり、発表・議論をしたり、レポートを書いたりすることによっては、特に旧学力観に基づく力が身につくとはいえないようである。意識の面でも「受験に役立つ知識」が身についたとは考えられていないし、偏差値にも結びついていない⁽²⁾。

高校生の分析からわかるのは、旧学力は新学力に影響を与えているのに対し、新学力観型授業は旧学力の形成に影響を与えないという点である。

4.2 大学段階での学力形成

それでは、高校での新学力観型授業は大学生活や大学での学習にどのような影響を与え

表5 自分の専門科目への積極度を従属変数とする重回帰分析

	B	標準誤差	β	
女子ダミー	-0.258	0.156	-0.191	
wave 1 模試偏差値	-0.016	0.008	-0.214	†
wave 1 自分たちの考えを発表したり、意見を言いあう授業	0.179	0.095	0.217	†
定数	4.032	0.599		**
N	71			
F 値	2.906	*		
調整済み R ² 乗値	0.115			

** >0.01、* >0.05、† >0.10

(2) ただし、注意しなければならないのは、新学力観型授業が旧学力にプラスの効果をもたらさないからといって、新学力観型授業をやめるべきだということにはならないということである。なぜなら、通常、新学力観型授業に積極的に参加するとその分旧学力の形成が阻害されると考えられるが、データから見る限りマイナスの影響は見られないからである。つまり、これまでの研究では、新学力観型授業を行うと旧学力が落ちるという知見が出されてきたが、岡山操山中学・高校のデータに関する限り、そうした傾向は見られないということである。旧学力を下げず、かつ、新学力を形成しているのならば、十分な効果があると考えられよう。

ているだろうか。

表5は、自分の専門科目への積極度を従属変数とする重回帰分析の結果である。これを見ると、まず、旧学力の指標である国数英の全国偏差値は大学の専門科目への積極度に負の影響を与えている。大学受験で必要とされる力と大学の専門科目で必要とされる力に齟齬があり、その結果として高校時に旧学力を身に付けた生徒ほど大学の専門科目で苦勞すると解釈できる。それに対し、新学力観型授業の指標である発表・議論型授業は専門科目積極度に対して正の効果があるようである。発表・議論型授業で議論のやり方を身に付けたことによって、未解決の問題に迫っていく専門科目へ積極的に参加できるようになったと解釈できる。

専門科目以外への影響はどうだろうか。それをまとめたのが表6である。これを見ると、wave1における調べ学習や発表・議論型授業は、wave1における偏差値をコントロールしたうえでも大学生生活にプラスの影響を与えているようである。まず、調べ学習積極度を見ると、大学の学習場面において「必要な情報を要領よく集めること」「調べたことや自分の考察をうまく文章にすること」にプラスの影響を与えている。次に、発表・議論積極度を見ると、「自分の専門科目」「講義出席率」「共同作業の場面で、リーダーシップを発揮すること」「議論する場面で、他人の意見をふまえて発言すること」に影響を与えている。大学学習力に着目すれば、高校時に調べ学習に積極的に参加した生徒は大学でも調べ学習がうまくでき、高校時に発表・議論型授業に積極的に参加した生徒は大学でも共同作業や議論をうまくできると解釈できる。

表6 wave1 調べ学習積極度、発表・議論積極度と大学生生活

		wave 1 処置変数	
		調べ学習積極度	発表・議論積極度
学生生活	自分の専門科目		†
	専門以外の教養科目		
	資格取得のための勉強		
	サークル活動・部活動		
	アルバイト		
	友だちづきあい		
	講義出席率		†
大学学習力	計画通りに学習をすすめること		
	必要な情報（資料、文献など）を要領よく集めること	†	
	調べたことや自分の考察をうまく文章にすること	*	
	共同作業の場面で、リーダーシップを発揮すること		*
	議論する場面で、他人の意見をふまえて発言すること		*

** >0.01、* >0.05、† >0.10

5. 考察

以上の分析から得られた知見は、中学・高校の分析について、第一に、旧学力の指標としての模試偏差値は、新学力の指標としてのレポート執筆力に影響を与えている。第二に、新学力のレポート執筆力は、自ら学ぶ力、身につけた力、将来観によい影響を与えている。しかし、第三に、レポート執筆力は、旧学力の指標としての模試偏差値にはよい影響を与えとは言えない。大学生の分析について、高校時代の新学力観型授業は、大学での学習にプラスの影響を与えている。

以上の結果から、第一に考察しなければならないのは、旧学力としての模試偏差値は新学力としてのレポート執筆力に影響を与えているにもかかわらず、新学力の指標としてのレポート執筆力が旧学力への模試偏差値には影響を与えていないのはなぜかということである。本稿の分析結果から導かれる仮説は、新学力から旧学力への戻り方を知らないからというものである。実際、系統別課題研究を終えた高校2年生のインタビューから得られたのは、「総合の時間は、各教科の勉強とは別」という声である。模試の偏差値は、生徒が意識をしなくてもレポート執筆力によい影響を与えるのに対し、レポートを書いた後にそれが各教科の勉強とどうつながっているかを示さないと、レポートでの経験が各教科への勉強に結び付かないということである。

第二に考察しなければならないのは、高校と大学の接続の問題である。大学生の分析からわかったように、新学力観型授業への積極的参加は大学での学習にプラスの影響がある一方で模試偏差値には結びつかないため、高校生としては大学に入るための学力を身につけるべきか入ってから学力を身につけるべきかという難しい問題に悩まされてしまうということである。ここに、高校の学力と大学の学力を結びつけるためのロジックが必要となる。

そこで、最後に政策提言において、レポートの経験を各教科へ結びつけ、かつ、高校の学力と大学の学力とをつなげるための仕組みを提言することにする。

6. 政策提言

それでは、総合の時間と各教科、高校の学力と大学の学力をつなげていくためには、どのような仕組みが必要だろうか。筆者が考案したのは、「あんどうメモ」というメモを通して、思考のフォーマットとプロセスを教え、レポートで主張をした後に各教科の勉強へ戻る回路を示すということである。

この「あんどうメモ」を考案するまでに、文献調査とインタビュー調査を行った。まず、文献調査では、これまでに出版されてきた文章の書き方に関する国内外の本265冊をレビューした。分野も、レポートの書き方にとらわれず、作文・論文・エントリーシー

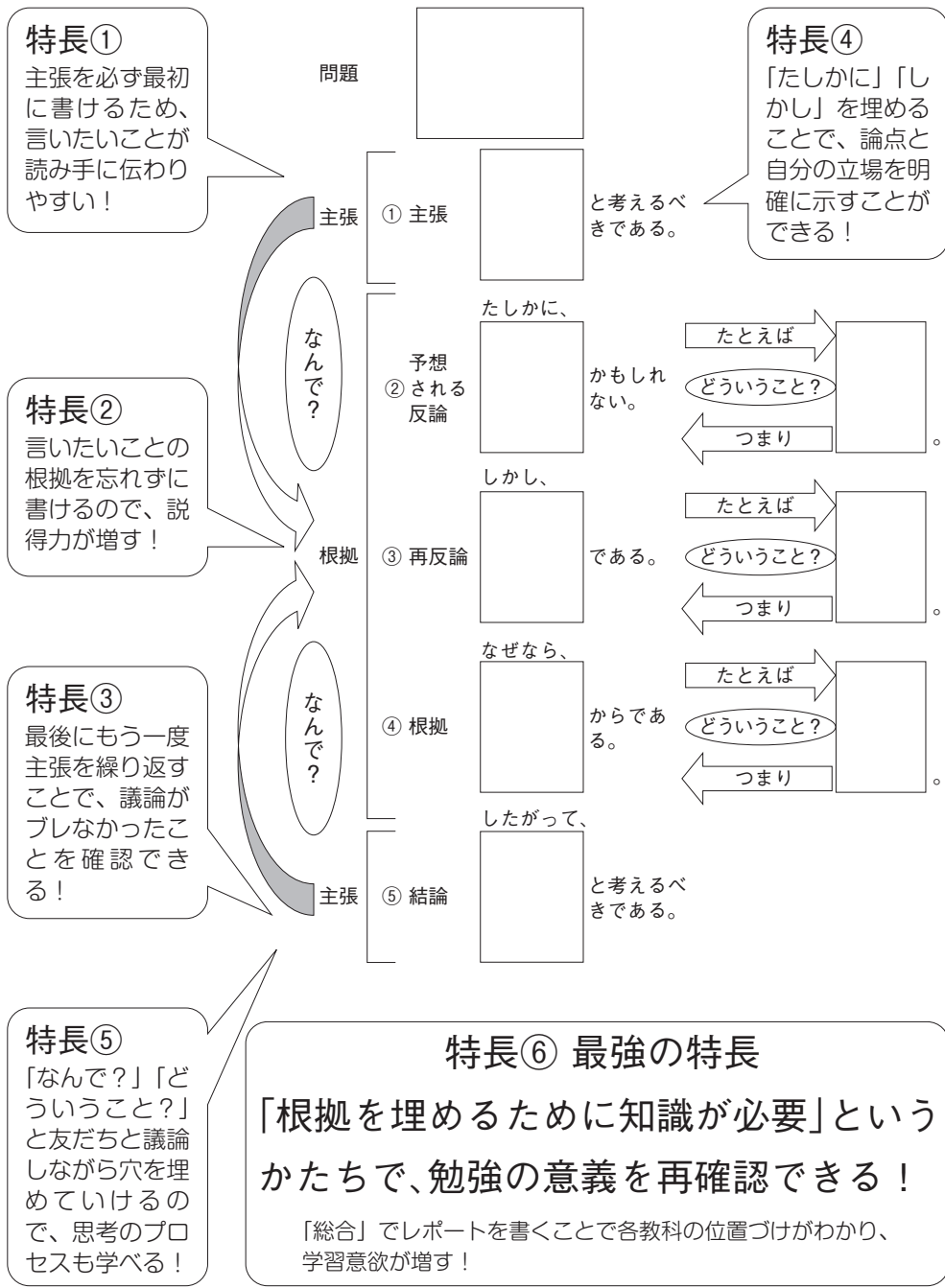


図2 「あんどウメモ」の特長 (添付テキストより抜粋)

ト・企画書などの書き方に関するもの、問題解決能力やクリティカル・シンキングやディベートなど議論や思考のプロセスに関するものなどまで幅広く渉猟を行った。次に、インタビューについては、高校生・大学生・大学院生を対象とし、勉強を進めるうえで困っていることを把握した。

そこからあぶりだされたレポートの書き方に関する問題は、各学校段階で文章の書き方

のルールが異なるため、生徒・学生は何をどう書いたらよいかわからなくなってしまっているということである。これに対処するために、さまざまな文章執筆法・思考法のエッセンスを凝縮し、中高生でもすぐに利用可能な仕組みを「あんどうメモ」として開発した。

図2が「あんどうメモ」の特長をまとめたものである。詳細は、添付のテキストに譲るが、最強の特長は、「根拠を埋めるために知識が必要」というかたちで、知識を身につけるための各教科の勉強の重要性を再認識できるということである。

これまで、たしかに、総合の時間は、教員の側からも生徒の側からも、各教科と連続的に語られることがなかった。しかし、思考力を「根拠を持って主張すること、あるいは、主張をするために根拠を埋めること」と定義すると、「主張を重視するのが総合の時間」「根拠を埋めるために知識を身につけるのが各教科の勉強」というかたちで、総合と各教科を連続的にとらえることができるようになる。また、大学で主張を行うために、高校での知識の蓄積が必要というかたちで、高校と大学の学力をつなげて考えることができるようになる。そして、それを授業の場面で使いやすくメモのかたちにしたものを「あんどうメモ」と名付けたのである。

さらに、これにより、新・旧学力論争を新たな観点からとらえなおすことができる。図3は、学力論争の図式を簡単にしたものである。縦軸は、教える／学ぶ内容が自由か決定されているか、横軸は教える／学ぶ方法・形式が自由か決定されているかを示す。

まず、新学力観が導入される前は、いわゆる「詰め込み教育」がなされていた。これは、ドリルやテストなどに象徴されるような内容も方法・形式も決定されていたものである。それへの反動で行われた新学力観型授業では、内容も方法・形式も自由になされた。その結果、実際になされた総合学習では、生徒の側からすれば何をどう調べ、どう書いてよいかわからないという状況が生まれた。

それに対し、「あんどうメモ」は、教える／学ぶ内容は自由だが、教える／学ぶ方法・形式は決定されていなければならないという立場である。図2からわかるように、思考のフォーマットであると同時に、議論や勉強という、主張へのプロセスとの接続もなされており、これを教え、これを学ぶことで自ら考える力が養われていくと考えられるからである。これは、考える方法を教えるという政策理念としての総合学習を実際に授業で実施可能なかたちにしたものと考えられる⁽³⁾。

⁽³⁾ 内容と方法・形式という2つの軸で考えると、教える／学ぶ内容は決定されているが、教える／学ぶ方法・形式は自由という象限が考えうる。これについては、本稿の目的とされるため、「超」勉強法や漫画『ドラゴン桜』の例を挙げるにとどめる。

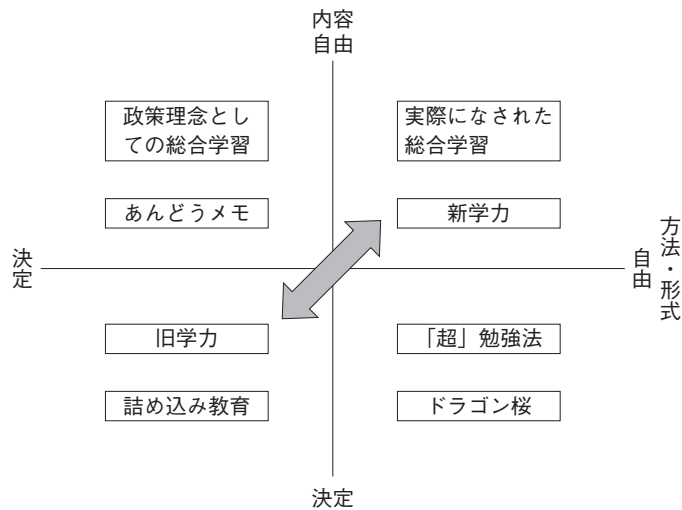


図3 学力論争の図式

注意しなければならないのは、こうした知見と政策提言は、旧学力か新学力かという論争に対して「卵が先か鶏が先か」というような根拠しか与えられなかったこれまでのデータに対し、高1の状況、高2の状況、高3の状況と個人を時系列に追ったパネルデータを用いたからこそ得られたものであるということである。

今後の課題は、「あんどうメモ」が実際に旧学力や大学での学力につながっていくかを検証していくことである。本年度、さまざまな文章読本をふまえたうえで、中高に使えるテキストを作成できた。来年度は、このテキストを用いて高校2年生が総合の時間のレポートを書く予定である。レポートから模試偏差値へよい効果が見られるかどうかは、来年度もアンケートを継続し、実証データに即して検証していきたい。

【参考文献】

- 安藤理，2006，「学び合い」型授業の効果，荻谷剛彦・安藤理ほか著『教育改革を評価する』岩波ブックレット，20-26
- 川口俊明，2009，マルチレベルモデルを用いた「学校の効果」の分析—「効果的な学校」に社会的不平等の救済はできるのか—，教育社会学研究，84：165-184
- 須藤康介，2007，授業方法が学力と学力の階層差に与える影響—新学力観と旧学力観の二項対立を超えて—，教育社会学研究，81：25-44

【テキスト執筆に用いた参考文献】

- A・オスラー・H・スターキー（著）／清田夏代・関芽（訳），2009，シティズンシップと教育—変容する世界と市民性，勁草書房
- Betsy Cassriel/Marit Ter-Mate Martinsen, 2010, Academic Connections 1, PEARSON Longman
- Charles LeBeau/David Harrington, 2006, Discussion Process and Principles, Language Solutions Inc.
- David Hill, 2010, Academic Connections 2, PEARSON Longman
- Dr. Floyd J. Fowler, 2008, Survey Research Methods (Applied Social Research Methods), Sage Publications, Inc ; Fourth Edition
- John Swales, Christine B. Feak, 2004, Academic Writing for Graduate Students : Essential Tasks and Skills (Michigan Series in English for Academic & Professional Purposes), The University of Michigan Press
- Keith S. Folse, 1996, Discussion Starters Speaking Fluency Activities for Advanced ESL/EFL Students, The University of Michigan Press
- Kelli Ripatti/Lucy Han, 2007, Essay Writing for Beginners Book 1 Integrated Writing/Book 2 Independent Writing, Compass Publishing
- Lila Prap, Lili Potpara, 2005, Why?, Kane Miller Book Pub
- Marty Nemko, Ph.D., 2004, The All-in-One college Guid, eBARRON'S
- Professor Richard G. Niemi, Assistant Professor Jane Junn, 2005, Civic Education : What Makes Students Learn, Yale University Press
- Ragin, Charles C., 1994, Constructing Social Research : The Unity and Diversity of Method (Sociology for a New Century Series), Pine Forge Press ; Second Edition
- Robert M. Groves, Floyd J. Fowler Jr., Mick P. Couper, James M. Lepkowski, 2009, Survey Methodology (Wiley Series in Survey Methodology) Wiley ; Second Edition
- Roberta Markman, Ph.D./Peter T. Markman/Marie L. Waddell, 2001, 10 Steps in Writing the Research Paper, BARRON'S
- Stanley Presser, Jennifer M. Rothgeb, Mick P. Couper, Judith T. Lessler, Elizabeth Martin, Jean Martin, Eleanor Singer, 2004, Methods for Testing and Evaluating Survey Questionnaires (Wiley Series in Survey Methodology), Wiley-Interscience
- Toulmin, Stephen, 2003, Return to Reason, Harvard University Press
- Toulmin, Stephen E., 2003, The Uses of Argument, Cambridge University Press
- Trudy Smoke, 2005, A Writer's Workbook A Writing Text with Readings, Cambridge University Press
- William R. Smalzer, 2005, WRITE to be READ Reading, Reflection, and Writing, Cambridge University Press
- 6人の特別講義プロジェクト&モーニング編集部，2009，ドラゴン桜公式副読本 16歳の教科書2 「勉強」と「仕事」はどこでつながるのか，講談社
- 7人の特別講義プロジェクト&モーニング編集部，2007，ドラゴン桜公式副読本 16歳の教科書 なぜ学び、なにを学ぶのか，講談社
- あごろ松山，1994，素人の素人による素人のための文章講座，BOC 出版部
- ステイーヴン・ヴァン・エヴェラ（著）／野口和彦・渡辺紫乃（訳），2009，政治学のリサーチ・メソッド，勁草書房
- E.B. ゼックミスタ・J.E. ジョンソン（著）／宮元博章ほか（訳），1992=1997，クリティカル・シンキング 実践編，北大路書房
- ブルデュー（著）／石崎晴己・東松秀雄（訳），1997，ホモ・アカデミクス，藤原書店
- ブルデュー（著）／田原音和（監訳），1991，社会学の社会学，藤原書店
- ブルデュー・シャンボルドン・パスロン，1994，社会学者のメチエ 認識論上の前提条件，藤原書店
- 愛知県犬山市立犬山北小学校，2008，学びの学校づくり 学力テスト不参加校 犬山北小学校の改革への挑

戦！, 小学館

芦永奈雄, 2004, 「本当の学力」は作文で劇的に伸びる, 大和出版

芦永奈雄, 2006, 読むだけで「書く力」が劇的に伸びる本—作文指導のプロが教える大人のための文章講座, 大和出版

安彦忠彦, 2009, 平成21年版 高等学校学習指導要領 改訂のピンポイント解説, 明治図書出版

安養寺重樹, 2001, 高校合格100%ブックス 受かる志願理由・自己推薦 書き方ノート, 学研

伊藤義之, 2005, はじめてのレポート **Workbook**, 嵯峨野書院

井上ひさし, 1987, 自家製文章読本, 新潮社

井田朋子, 2008, 高校生のための論理力を伸ばすトレーニングブック, 早稲田経営出版

宇治芳雄, 1993, 悠飛社文章講座「新・虎の巻」改訂版, 悠飛社

碓井崧, 2007, 社会学—原典で読む「規格化」と「多様化」, ミネルヴァ書房

浦上昌則・脇田貴文, 2008, 心理学・社会学研究のための調査系論文の読み方, 東京図書

塩田良平, 1969, 文章の作り方 改訂版, 明治書院

旺文社(編), 2009, 2010年受験対策 全国大学 小論文入試2005~2009 出題内容5か年ダイジェスト, 旺文社

横山雅彦, 2006, 高校生のための論理思考トレーニング, ちくま新書

横浜国立大学教育人間科学部付属横浜中学校(編), 2007, 「読解力」とは何か **PartⅢ—カリキュラム・マネジメント**で年間指導計画・学習プロセス重視の指導案—, 三省堂

横浜国立大学教育人間科学部付属横浜中学校 **FY** プロジェクト(編), 2006, 「読解力」とは何か—**PISA** 調査における「読解力」を核としたカリキュラムマネジメント—, 三省堂

加藤典洋, 1996, 言語表現法講義, 岩波書店

外山滋比古, 1986, 思考の整理学, 筑摩書房

外山滋比古, 2000, ちょっとした勉強のコツ, みくに出版

樺島忠夫, 1978, 文章構成法, 講談社

萱間真美, 2007, 質的研究実践ノート 研究プロセスを進める **clue** とポイント, 医学書院

荻谷剛彦, 2002, 知的複眼思考法, 講談社+α文庫

荻谷剛彦, 2008, 学力と階層 教育の綻びをどう修正するか, 朝日新聞出版

丸谷才一, 1980, 文章読本 改版, 中央公論新社

岩永雅也・稲垣恭子, 2007, 新版 教育社会学, 放送大学教育振興会

岩間輝生・太田瑞穂・坂口浩一・関口隆一(編), 2009, 高校生のための現代思想ベーシック—ちくま評論入門, 筑摩書房

岩淵悦太郎, 1979, 悪文 第3版, 日本評論社

吉岡友治, 2002, 吉岡のなるほど小論文講義10—書き方の基本からビジュアル課題まで, 桐原書店

吉岡友治, 2002, 大学院・大学編入学会入試の小論文—思考のメソッドとまとめ方, 実務教育出版

吉岡友治, 2004, 吉岡のなるほど小論文類出テーマ16—社会・文化・言語・医療 基本知識と解答をつなぐ, 桐原書店

久田則夫, 1995, ノリさんの楽々レポート作成術—福祉系学生・職員のための論文レポート作成マニュアル, 大揚社

久田則夫, 2003, 社会福祉の研究入門—計画立案から論文執筆まで, 中央法規出版

久道茂, 2007, 大学における初年次 少人数教育と『学びの転換』, 東北大学出版会

久富善之・長谷川裕, 2008, 教師教育テキストシリーズ5 教育社会学, 学文社

教育実習を考える会(編), 2005, 教育実習生のための学習指導案作成教本 社会・地歴公民科, 蒼丘書林

教学社編集部(編), 2009, 東京大学(文科—前期日程), 教学社

駒井伸俊, 2008, 図解入門ビジネス 最新問題解決の実践とカラクリがよ〜くわかる本, 秀和システム

桑原武夫, 1980, 文章作法, 潮出版社

犬山市教育委員会, 2005, 自ら学ぶ力を育む教育文化の創造—犬山市の教育改革のさらなる展開, 黎明書房

原子朗, 1994, 修辞学の史的研究, 早稲田大学出版部

原純輔・海野道郎, 2004, 社会調査演習 第2版, 東京大学出版会

原純輔・浅川達人, 2009, 改訂版 社会調査, 放送大学教育振興会

古郡延治, 1997, 論文・レポートのまとめ方, ちくま新書

古川昭夫, 宮下いづみ, 2007, イギリスの小学校教科書で楽しく英語を学ぶ, 小学館

古川昭夫, 宮下いづみ, 2008, 続・イギリスの小学校教科書で楽しく英語を学ぶ, 小学館

戸田山和久, 2005, NHK ブックス [1022] 科学哲学の冒険 サイエンスの目的と方法をさぐる, 日本放送出版協会

広岡義之 (編), 2009, 新しい道德教育—理論と実践, ミネルヴァ書房

香西秀信, 2009, 反論の技術—その意義と訓練方法, 明治図書

高校入試研究会 (編), 2008, 高校合格100%ブックス 高校入試『作文』完全攻略, 学研

高校入試問題研究会 (編著), 2005, 高校入試必勝ガイド 作文・小論文受験, 研究社

高松正昭, 1979, 創造の方法学, 講談社現代新書

国立教育政策研究所 (監訳), 2007, PISA2006年調査評価の枠組み—OECD 生徒の学習到達度調査, ぎょうせい

国立教育政策研究所 (編), 2008, 生きるための知識と技能3—OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) 2006年度調査国際結果報告書, ぎょうせい

佐藤美知子・伊藤和実・村山士郎・西條昭男, 2007, 明日の授業に使える小学校国語 書くこと—1・2年生 ことばってふしぎだね, 大月書店

佐藤郁哉, 2008, 質的データ分析法—原理・方法・実践一, 新曜社

佐藤郁哉, 2008, QDA ソフトを活用する実践—質的データ分析入門, 新曜社

佐藤学, 1999, 教育改革をデザインする<シリーズ教育の挑戦>, 岩波書店

佐藤学, 2000, 「学び」から逃走する子どもたち, 岩波ブックレット

佐藤学, 2001, 学力を問い直す—学びのカリキュラムへ, 岩波ブックレット

佐藤学, 2003, 教師たちの挑戦 授業を創る 学びが変わる, 小学館

佐藤学, 2006, 学校の挑戦 学びの共同体を創る, 小学館

佐藤学, 2009, 教師花伝書—専門家として成長するために一, 小学館

佐藤信夫, 1992, レトリック感覚, 講談社

佐藤智明・矢島彰・谷口裕亮・安保克也 (編著), 2008, 大学 学びのことはじめ, ナカニシヤ出版

斎藤美奈子, 2002, 文章読本さん江, 筑摩書房

崎村耕二, 2009, 論理的な英語が書ける本, 大修館書店

桜井厚, 2002, インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方, せりか書房

桜井厚・小林多寿子 (編著), 2005, ライフストーリー・インタビュー, せりか書房

三田紀房, 2005~2007, ドラゴン桜 1~21, 講談社

山下正男, 1985, 論理的に考えること, 岩波ジュニア新書

山口文憲, 2001, 読ませる技術, マガジンハウス

山田ズーニー, 2005, 考えるシート, 講談社

山田ズーニー, 2009, おとなの小論文教室, 河出書房新社

山田礼子, 2005, 一年次 (導入) 教育の日米比較, 東信堂

市川伸一, 2000, 勉強法が変わる本—心理学からのアドバイス, 岩波ジュニア新書

出口汪, 2000, 出口のシステム現代文【解法公式集】, 水王舎

小笠原喜康, 2002, 大学生のためのレポート・論文術, 講談社現代新書

小笠原喜康, 2003, 大学生のためのレポート・論文術—インターネット完全活用編一, 講談社現代新書

小浜裕久・木村福成, 1998, 経済論文の作法—勉強の仕方・レポートの書き方 増補版, 日本評論社

小林康夫・船曳建夫, 1998, 新・知の技法増補版, 東京大学出版会
小林弘忠, 1995, マスコミ小論文作法, 三一書房
松宮義仁, 2009, A6 ノートで読書を超速化しなさい, 徳間書店
照屋華子, 2006, ロジカル・ライティング, 東洋経済新報社
森靖雄, 2005, 新版 やさしい調査のコツ, 大月書店
森靖雄, 2007, 大学生の学習テクニク 新版, 大月書店
森岡健二, 1995, 文章構成法, 至文堂
森岡清志 (編著), 2007, ガイドブック社会調査第2版, 日本評論社
森美笛, 1999, 書いて愛される女になる, 日本教文社
森脇逸男, 1995, 書く技術 新版, 創元社 (大阪)
深見悦司, 2009, 小学生の自由研究5・6年生, 成美堂出版
杉浦克己, 2007, 日本語表現法, 放送大学教育振興会
杉江修治, 2003, 子どもの学びを育てる少人数授業—犬山市の提案—, 明治図書
成美堂出版編集部 (編), 2009, スイスイ! ラクラク!! 読書感想文 小学1・2年生/小学3・4年生/小学5・6年生, 成美堂出版
成美堂出版編集部 (編), 2009, 夏休みの自由研究 小学1・2年生/小学3・4年生, 成美堂出版
清水幾太郎, 1959, 論文の書き方, 岩波書店
清水義範, 2004, 大人のための文章教室, 講談社現代新書
生活ネットワーク研究会, 1996, すぐ役立つ手紙の書き方 新版, 法研
盛山和夫, 2004, 社会調査法, 有斐閣ブックス
盛山和夫, 2004, 統計学入門, 放送大学教育振興会
青木伸生 (編著) / 尾道市立上川辺小学校 (著) 2008, 新時代の国語科授業 確かな読解力と豊かな表現力の育成, 東洋館出版社
石橋和代, 2004, Eメール・手紙で使う英語表現集, ベレ出版
石川和幸, 2008, 「見える化」仕事術, デイスクヴァー・トゥエンティワン
石川和幸, 2008, 思考のボトルネックを解除しよう!, デイスクヴァー・トゥエンティワン
石川和幸, 2008, 図解 SCM のすべてがわかる本, 日本実業出版社
石川淳志・佐藤健二・山田一成, 1998, 見えないものを見る力—社会調査という認識, 八千代出版
川喜多二郎, 1970, 続・発想法, 中公新書
川端康成, 1951, 新文章讀本, たちばな出版
相澤祐介, 2007, 効果的な論文発表のための PowerPoint2007徹底ガイド—研究発表に使える実践テクニク, カットシステム
相澤祐介, 2007, 数式作成に使う Word2007活用法, カットシステム
増田四郎, 1966, 大学でいかに学ぶか, 講談社現代新書
足立幸男, 1984, 議論の論理—民主主義と議論, 木鐸社
村山士郎, 2007, 現代の子どもと生活綴方実践, 新読書社
大隈秀夫, 1975, 文章の実習 新訂版, 日本エディタースクール出版部
大倉徹也, 1995, 「超」文章讀本, 影書房
大島田人・河村清一郎, 1973, 資料 近代文章史, おうふう
大桃敏行・上杉孝実・井ノ口淳三・植田健男, 2007, 教育改革の国際比較, ミネルヴァ書房
大野晋, 1999, 日本語練習帳, 岩波書店
沢田昭夫, 1977, 論文の書き方, 講談社
辰濃和男, 1994, 文章の書き方, 岩波書店
谷崎潤一郎, 1975, 文章讀本 改版, 中央公論新社

- 池谷裕二, 2002, 最新脳科学が教える高校生の勉強法, 東進ブックス
- 筑波大学付属小学校教諭 青木伸生 (監修), 2007, 必ず書ける あなうめ読書感想文, 学研
- 筑波大学付属小学校教諭 青木伸生 (監修), 2008, あなうめで完成 ちかみち作文, 学研
- 筑波大学付属小学校教諭 青木伸生 (監修), 2009, 必ずまとまる あなうめ自由研究, 学研
- 中井浩一, 2006, 脱マニュアル小論文—作文と論文をつなぐ指導法, 大修館書店
- 中井浩一, 2009, 正しく読み, 深く考える 日本語論理トレーニング, 講談社
- 中山元, 2005, 高校生のための評論文キーワード100, ちくま新書
- 中山康雄, 2008, 科学哲学入門 知の形而上学, 勁草書房
- 中村明, 1995, 悪文, 筑摩書房
- 坪田一男, 1997, 理系のための研究生生活ガイド—テーマの選び方から留学の手続きまで (ブルーバックス), 講談社
- 坪田一男, 2007, 理系のための楽しい研究生生活, 医歯薬出版
- 田宮輝夫, 1978, 生活綴方入門—作文教育のすすめ, 百合出版
- 田代菊雄, 2001, 学生・院生のための研究ハンドブック大学 4版, 教育出版
- 田中喜美子・和田好子, 2000, 自分を表現できる文章の書き方, 毎日新聞社
- 渡部昇一, 1976, 知的生活の方法, 講談社現代新書
- 渡辺雅子 (編), 2003, 叙述のスタイルと歴史教育—教授法と教科書の国際比較, 三元社
- 渡辺健介, 2007, 世界一やさしい問題解決の授業, ダイヤモンド社
- 土佐いく子・小宮山繁・村山士郎・西條昭男, 2007, 明日の授業に使える小学校国語 書くこと—3・4年生 伝えあうってたのしい, 大月書店
- 土谷望, 2007, これさえあれば大丈夫! はじめての英文Eメール, リント
- 塔島ひろみ, 1994, 楽しい「つづり方」教室 増補版, 人間の科学新社
- 嶋貫健司 (著) / 今西真孝 (協力), 2007, 論文・レポート作成に使う Word2007活用法—Wordを真っ当に使うためのスタイル活用テクニック, カットシステム
- 東京大学学校教育高度化センター (編), 2009, 基礎学力を問う—21世紀日本の教育への展望, 東京大学出版会
- 内井惣七, 1995, 科学哲学入門—科学の方法・科学の目的—, 世界思想社
- 日本教育方法学会 (編), 2009, 日本の授業研究—Lesson Study in Japan— 授業研究の歴史と教師教育 (上巻) / 授業研究の方法と形態 (下巻), 学文社
- 日本生活科・総合的学習教育学会, 2001~2009, せいかつか&そうごう第8~16号, 初教出版
- 日本生活科・総合的学習教育学会, 2008~2009, 生活科・総合の実践ブックレット 第2号 (生活科から総合への接続と展望) / 第3号 (新学習指導要領と生活科・総合の課題)
- 日本生活科教育学会, 1998/2000, せいかつか 第5/7号, 初教出版
- 日本生活科教育学会, 1999, 総合的な学習に向けて 生活科教育文献目録1989-1997
- 梅田卓夫・清水良典・服部左右一・松川由博 (編), 1986, 高校生のための文章読本, 筑摩書房
- 梅棹忠夫, 1969, 知的生産の技法, 岩波新書
- 萩野貞樹, 1992, 名文と悪文, 日本教文社
- 白濁敏郎, 2008, 仕事の「5力」, 中経出版
- 白木次雄・浦木秀雄・中村博・武藤あゆみ, 2007, 明日の授業に使える小学校国語 書くこと—5・6年生学力の土台をつくる, 大月書店
- 板坂元, 1973, 考える技術・書く技術, 講談社現代新書
- 板坂元, 1977, 続・考える技術・書く技術, 講談社現代新書
- 飯間浩明, 2008, 非論理的な人のための 論理的な文章の書き方入門, デイスクヴァー・トゥエンティワン
- 樋口裕一, 1995, 読むだけ小論文, 学研
- 樋口裕一, 1995, 合格小論文のネタ集, ごま新書

- 樋口裕一, 1997, 「型」書き小論文, 学研
- 樋口裕一, 2000, 樋口裕一の小論文トレーニング, ブックマン社
- 樋口裕一, 2000, ぶっつけ小論文 改訂新版, 文英堂
- 樋口裕一, 2001, 読むだけ小論文 ①入門編改訂版/②応用編/③医歯薬・看護系編, 学研
- 樋口裕一, 2002, 高校入試 ぶっつけ入試作文, 文英堂
- 樋口裕一, 2003, 高校合格100%ブックス 高校入試 受かる!小論文, 学研
- 樋口裕一, 2006, 樋口式「頭のいい人」の文章練習帳, 宝島社新書
- 文部科学省, 2005, 高等学校学習指導要領解説 地理歴史編, 実教出版
- 文部科学省, 2008, 中学校学習指導要領解説 国語編/総合的な学習の時間編/社会編, 東洋館出版社
- 文部科学省, 2008, 中学校学習指導要領, 東洋館出版社
- 文部科学省, 2008, 小学校学習指導要領, 東洋館出版社
- 文部科学省, 2008, 小学校学習指導要領解説 国語編, 東洋館出版社
- 文部科学省, 2009, 高等学校学習指導要領解説 公民編, 実教出版
- 文部科学省(編), 2009, 文部科学省白書 平成20年度, 佐伯印刷
- 文部省, 1999, 高等学校学習指導要領解説 国語編, 東洋館出版社
- 保坂弘司, 1978, レポート・小論文・卒論の書き方, 講談社
- 豊田正子・山住正己, 1995, 新編綴方教室, 岩波書店
- 北岡俊明, 1999, 文章力総合, 法令出版
- 本多勝一, 1982, 日本語の作文技術, 朝日新聞出版
- 本田由紀, 2009, 教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ, ちくま新書
- 無着成恭, 1995, 山びこ学校, 岩波書店
- 門脇薫・西馬薫, 1999, みんなの日本語 初級 やさしい作文, スリーエーネットワーク
- 野口悠紀雄, 1993, 「超」整理法, 中公新書
- 野口悠紀雄, 1995, 「超」勉強法, 講談社
- 野口悠紀雄, 1995, 続「超」整理法・時間編, 中公新書
- 野口悠紀雄, 2002, 「超」文章法, 中公新書
- 野村一夫, 1995, 社会学の作法・初級編—社会的リテラシー構築のためのレッスン, 文化書房博文社
- 野地潤家, 1986, 作文綴り方教育史資料 下巻, おうふう
- 野矢茂樹, 1999, 哲学・航海日誌, 春秋社
- 野矢茂樹, 2006, (哲学教科書シリーズ) 新版論理トレーニング, 産業図書
- 李妍淑, 1996, 「国語」という思想, 岩波書店
- 立花隆, 1984, 「知」のソフトウェア—情報のインプット&アウトプット—, 講談社現代新書
- 和田秀樹, 2003, 頭のいい大学四年間の生き方, 中経出版
- 和田朋子, 2007, はじめての英語論文 引ける・使える パターン表現&文例集, すばる舎
- 鷺田小弥太, 1992, 知的生活を楽しむ小論文作法, 三一書房
- 高木展郎(監修)/三浦修一・竹下恭子・三藤敏樹・宮城洋之・吉野精一郎(研究・執筆), 2007, 「読解力」
をはぐくむ国語学習—探求する学び、発信する学びをめざして—, 三省堂
- 高木展郎・三浦修一(編著), 2009, 中学校新教育課程—国語科の指導計画作成と授業づくり, 明治図書出版
- 高木展郎・白井達夫(編著), 2009, 小学校新教育課程—国語科の指導計画作成と授業づくり, 明治図書出版
- 高校入試 攻略!作文問題, 富士教育出版社